

“わたしのまち”

江戸川区特産の金魚をあしらった伝統工芸品
①つりしのぶ、②江戸風鈴、③江戸ゆかた、④江戸扇子

江戸川区

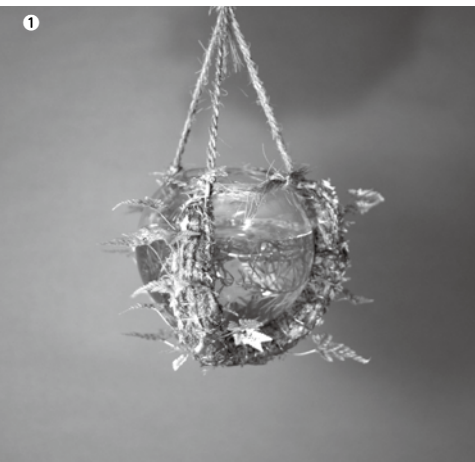
江戸川を彩る夏の風物詩

金魚と朝顔、そして伝統工芸品

夏と聞いて、金魚や朝顔、浴衣や風鈴、扇子などを
思い浮かべる人も多いのではないだろうか。

実は、これらが江戸川区の特産品でもあることをご存じですか。

夏に向けて生産が盛んになるこの季節、江戸川区の夏の風物詩を紹介します。



江戸川区ならではの夏を巡る

金魚三大産地の誇り

江戸川区の金魚養殖は、明治末頃に金魚生産者が水質良好な江戸川区に移転してきたことから始まりました。大正12年の関東大震災以降、金魚の更なる需要増大と砂町方面の工業化に伴い区に小売業者が増えたことで、金魚養殖が盛んになりました。

第二次世界大戦中、養殖池は、耕地などへの転用を強いられるなど、金魚の品種絶滅の危機に瀕しましたが、終戦を迎え、金魚養殖は復活し、最盛期には23軒の養殖業者で、5000万匹の金魚が生産され、江戸川区は愛知県弥富市、奈良県大和郡山市と並ぶ金魚

の日本三大産地の一つになりました。

その後の高度成長を経て、急速な都市化や河川の水質汚濁で、養殖業者は関東近県に移転し現在は2軒の養殖業者を残すのみとなっています。しかし、区の養殖業者は良質な金魚の伝統を守り続けています。

金魚の美しさを競う「日本観賞魚フェア(後述)」内の「全日本金魚品評会」では、江戸川区産の「琉金」が同品評会最高峰の「農林水産大臣賞」を数多く受賞するなど高い評価を得ています。

夏を代表する花 朝顔の栽培

江戸川区の花弁園芸は、江戸時代に大杉地区のあたりで菊の栽培が始まり、明



えどちゃん

区特産の金魚を全国にPRするため、金魚をもっと身近に感じてもらうために生まれたキャラクター。イベントでは子どもから人気を集めています



最盛期には23軒あった養殖業者も2軒を残すのみとなった。しかし、今も良質な金魚の生産地の伝統を守り続けている

季節のお出かけスポット

江戸川区の金魚のイベント

3月 金魚の初競り

首都圏の生産業者が丹精込めて育てた「琉金」や「和釜」などを出品し、15種、約9万匹が仲買人に競り落とされます。



様々な観賞魚が一挙展示。美しい観賞魚の姿に思わず見とれてしまう

4月 日本観賞魚フェア

伝統的な金魚をはじめ、多彩な観賞魚が580個の水槽で展示されました。また「観賞魚ディスプレイコンテスト」や「特選高級金魚オークション」など、たくさんの催しが行われ、3日間で約3万人が訪れました。



「江戸川区特産金魚まつり」は夏の風物詩として定着している

7月 江戸川区特産金魚まつり

金魚を身近に感じる夏のイベントとして親しまれています。第45回となる今年度は、7月23日（土）、24日（日）に開催されます。会場では、生産者自慢の高級品種の金魚の販売や毎年恒例となった約2万匹の金魚すくい、高級稚魚の金魚すくいに加えて、金魚をあしらった江戸風鈴などの模擬店も出展されます。夏休みに入った子どもたちや親子連れ、金魚愛好家など多くの来場者が訪れます。

治から大正時代に鹿骨地区など周辺地域に鉢花づくりが広がっていきました。戦後、区内の栽培農家では、朝顔やホオズキ、サクラソウ、ポインセチアやシクラメンといった洋花、春の七草

の寄植えや花壇苗などの多種類の草花が生産され、鉢物の卸売りも増えています。江戸川区で生産される草花は、丹精込めて育てられているため丈夫です。

そして、都市部で生産されるため、同じ気候の都市部でも育てやすいことが特長としてあげられます。

東京の夏の一大風物詩「入谷の朝顔市」は、大正時代に一度は途絶えましたが、戦後（昭和23年）に復活したのは、江戸川区の花弁農家によるところが大きかったとされています。現在もこの朝顔市で並ぶおよそ10万鉢の朝顔のうち、約7割を出荷しており、江戸川区は朝顔の一大産地となっています。朝顔の出荷最盛期になる7月は、区内の園芸農家で蕾に十分な栄養が届くように咲き終わった花を摘む「花殻摘み」や伸びたつるを「行灯（あんどん）」をつるを絡ませるための円柱形の骨組みに絡ませる「つる巻」の作業が行われている様子を見ることが出来ます。

また、生産される朝顔を身近に楽しんでもらおうと、区内では毎年7月に「江戸川松江銀座朝顔市」や「小岩あさがお市」なども開催され、多くの区民から親しまれています。

夏に魅力が花開く 伝統工芸品

江戸川区には伝統の技を受け継ぐ職人が多数活躍しています。中でも、江戸風鈴や江戸扇子など、夏に最盛期を



朝顔は、7月の出荷最盛期まで丹精込めて育てられる。また、区内では朝顔市が開かれるなど、夏の風物詩として定着している（朝顔の出荷の様子（下）と小岩あさがお市の様子（左）



迎える伝統工芸品が多く、区内に季節の訪れを教えてください。

特産の金魚をあしらったデザインや美大生やデザイナーとのコラボレーションによる現代風の商品など、豊富なラインナップも魅力のひとつです。

◆江戸風鈴

江戸風鈴は、江戸時代から作られているガラス風鈴で、長い竿で吹きながら空中でガラスを膨らませる「宙吹き」という伝統技法が用いられています。また、振り管がわずかに触れただけでも音色が響くよう「ギザギザを残した鳴り口」と、「ガラスの内側からの絵付け」に特徴があります。風に揺られ響く風鈴の音は、日本の夏に涼しさを与えてくれます。

“わたしのまち” 江戸川区



江戸扇子職人の松井宏さん。花菖蒲など季節に合った扇子も人気

3万枚もの古代型を所有。丹精込めて染め上げる江戸ゆかた職人高橋榮一さん



江戸風鈴職人の篠原儀治さんと由香利さん。子孫代々伝統が受け継がれている



都内では唯一となったつりしのぶ職人の深野晃正さん

◆つりしのぶ

つりしのぶは、竹などの芯材に山苔を巻きつけ、シノブ草をはわせた觀賞用の樹木です。江戸時代に庭師たちがお得意様へのお中元用に作ったのが始まりとされています。日本の夏の風物詩として、軒下などに吊るし、涼を取るために用いられていました。

1人で製作する伝統工芸品です。さらにびやかな京扇子に比べ、骨の数が少なく折り幅が広いのが特徴です。現在では都内でわずか数人となった職人が、伝統の技を受け継ぎ、一つひとつ丁寧に製作しています。パチツと音を立ててきれいに閉じる様から、江戸の粋が感じられます。

現在は卓上で楽しめる品も誕生し、多くの人々から親しまれています。

◆江戸ゆかた

江戸ゆかたは、柄が繊細で細かいことから現代では染色が困難とされる「古代柄（江戸・明治時代の染型紙）」を再現・復刻させた浴衣です。全国から収集した約3万枚の古代柄を用い、染色から乾燥まで全て手作業で一つひとつ丁寧に行われています。

古代柄を複数組み合わせた独自の絵柄と裏面にも現れる鮮やかな色合いが、魅力を一層際立たせています。

◆江戸扇子

江戸扇子は、江戸の町人文化から生まれ、30もの工程を職人

「EDO&TOKYO」のロゴを用いた5色展開の商品。現代的で洗練されたデザインは、江戸の粋を感じつつ、新たな魅力を発揮している



江戸てぬぐい



グラデーション江戸扇子



江戸風鈴

&TOKYOの取組

平成28年度からは、江戸川区の伝統や文化を全国や世界に向けて発信し、区の魅力を広めるため「&TOKYO」を活用したPRが始まっています。

活用するロゴ・キャッチコピーは、区の伝統産業である金魚をモチーフにした「江戸川金魚&TOKYO」と「EDOGAWA KINNGYO & TOKYO」の2種類が採用されています。

今年7月に行われる「第45回江戸川区特産金魚まつり」でもポスターやチラシなどの広告物を通じて、江戸川区の魅力を広くPRする予定です。

平成28年6月には、東京ブランド共同企画として「EDO&TOKYO」のオリジナル商品を開発。「江戸てぬぐい」、「グラデーション江戸扇子」、「江戸風鈴」といった伝統工芸品を用いたオフィシャルグッズを楽天ショップ「えどコレ!」などで販売しています。

江戸川区の産業や伝統文化が広く国内外へ情報発信される機会も増えつつあります。それをきっかけに、江戸川区の夏の風物詩を満喫してみるのも楽しいでしょう。